

# 欲生心の象徴的自覚

8

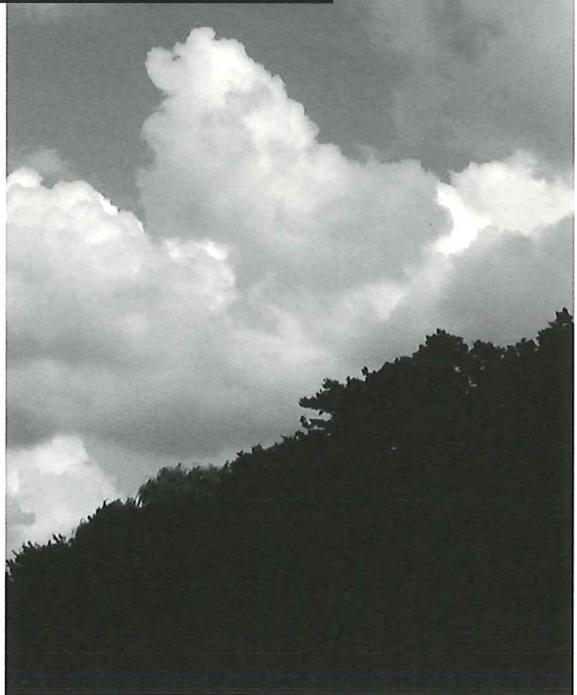
## 本多弘之

*honada hiroyuki*

親鸞は「至心信樂の願」の成就文の意図を、『教行信証』「信巻」において、徹底的に解明しようとしている。まずは、この本願の成就によって、衆生に眞実信心が成就することを明らかにする。それに先だつては、「教巻」において、如来の大悲が衆生に一切の功德を「回向」することによって、「教・行・信・証」が衆生の上に成就することを、往相回向の内容として明らかにした。その行は第十七願（諸仏称名の願）により、信は第十八願（至

心信樂の願）により、証は第十一願（必至滅度の願）により、それぞれ願力の回向成就として凡夫の上に成就する、と。教は、眞実教たる『大無量寿経』であり、それは「本願を説くをもつて教の宗致と」するのであるから、この教を回向する願は、特定の願というより、本願を言葉として説き出してくる根本意欲すなわち如来が衆生を招喚する意欲、つまり如来の「欲生心」であると考えられるのであろう。

そして、眞実信心の因願（至心信樂の願）に「三心」（至心・信樂・欲生）があることの意味を、『浄土論』の一心に對比して考察された。至心とは、名号を回向することによって、「虚仮雜毒」の衆生に「眞実心」が回向されることである。その至心を体として罪業深重の衆生に眞実の信樂が恵まれる。その信樂を、天親は「一心」と言うのだとされる。その信樂には「欲生」が付いている。その「欲生」の意味について、曾我量深は



信樂の「因相」であると考察された。信心から結果的に出てくる果相と考えるなら、衆生に起こる自力意識や効能への祈願の影を払拭できないという問題があるからである。では純粹満足な信心に、なぜ「欲生我国」が付くのか。これは信の果相として「欲生」を要求するのでなく、信の因相に常にはたらし続ける法藏願心の意欲を見いだすことによつて、眞實信心が煩惱具足の凡夫の生活に即しつ、心光常護の利益を確保するのだと見られたのである。

それは阿頼耶識の因相が種子識と名づけられていて、意識の相続を可能にする生存在の持続能力に当たる。常に未来への経験の可能性を持続する力が、阿頼耶識の因相とされているのである。それに対応させるなら、煩惱具足の生活を嫌わない大悲の心光が、つねに「煩惱具足の凡夫、生死罪濁の群萌」を撰取して、信心と共に、影の形に添うように闇を貫いてはたらし続けることを成立させるのが因相としての欲生心である、ということである。

その「欲生」の内容について、親鸞は「如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり」と言い、欲生は回向心であると言われている。それに続いて、「ここをもつて本願の欲生心成就の文」と題して、至心信樂の願成就の文の後半、「至心回向」以下を引用される。こ

の「至心回向」の「至心」は、不実の凡夫に「至心」は成り立たないのであるからには、大悲の回向と読み解かなければならない。そう読むことによつて、これ以下を「欲生心成就の文」と読まねばならない、と親鸞は決定されたのである。如来の願心がここに成就することを得る、ということである。

そう読むなら、「至心回向」とは、名号を回向して眞實心を衆生の上に発起させることである。その信心の内面の意味が、「願生彼国 即得往生 住不退転 唯除五逆 誹謗正法」と語られているのである、と。

そうであるなら、「願生彼国 即得往生」とは、「住不退転」という利益を、凡夫の生活上に恵む信心の内面的原理である。このように親鸞は「至心回向」以下を「欲生心成就の文」として読み解いた。これによつて、一如宝海よりかたちを表し御名を示して、苦悩の衆生に大乘仏教の智慧たる無上菩提の利益を与えようという意図が、理論的には完結する。「得不退転於阿耨多羅三藐三菩提」が、本願成就として衆生の上に、確保されるからである。

そこに、解明しなければならぬ課題が新たに与えられてくる。その課題が、欲生心釈に展開されている諸テーマなのであると思う。ここに、その問題のいくつかを提示してみよう。第一には、願生の意欲の対象たる「報

土」は、欲生心成就においてどういう位置になるのか。第二には、煩惱の生活に心光撰護が与えられていると言っても、生死の迷いが晴れないのならば、完全に救われているとは言えないのではないか。第三には、煩惱の生活が残るのなら、不退転の信念が持続しないのではないか。第四には、煩惱の衆生に涅槃の因たる信心が回向されても、果たる涅槃は、いつ獲得されるのか。このような自力根性の意識から問題提起が出される。いかにも回答困難な難題であると思われる。

親鸞はこのような問題に対して、金剛心、横超断四流、眞實弟子等の釈論を通して、根源的に応えようとされたのであると思う。その解明態度に一貫することは、大乘仏道の課題を、誓願によつて、凡夫の上に成就させずにはおかないという大悲心への信順であろう。徹底的に願力を信受することによつて、迷妄の凡夫に光明の広海が開かれることを明らかにする。それは、いわゆる浄土教の気分に残るコンプレックスがらみの「厭離穢土欣求淨土」の雲霧を払拭する方向なのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長  
近著に「増補版 親鸞教学―曾我量深から安田理深へ―」  
法藏館